

野長 ひとりごと

36

齊藤 讓

あるテレビの歌謡番組の中で、司会者が出演者に、こんな質問をした。

「日本の歌謡曲の詞の中に、一番多く出てくる身体の部分は何ですか。」

私も、おやっと思つて、咄嗟に「髪」「瞳」「項」「乳房」など、頭の中に浮かんでくるのは、すべて竹久夢二が描くような、愁いを深く秘めた魅力的な美女をイメージしたものであつた。

出演者の答えも、私と似たりよつたりであつたが、司会者の言う正解は、意外にも「手」だといふのである。手のつく歌を思い出しても、私のレパトリーでは、いっこう思いつかない。ようやく思い出したのが「幸せなら手をたたこう」か「小指の思い出」「手のひらを太陽に」といった程度であつた。

考えてみれば、たしかに人間の手には、いろいろな表情があり、人の気持ちと通じているところがある。そこが作詞家の心をとらえ、いろいろな表現の素材として使われるのであろう。俗に、女性の細く美しい手を「しら魚のような手」と形容し、よく誉め言葉に使う。たまに、酔つた男が、自分の手よりもはるかに黒く美しい女性の手をとつて、「しら魚のようにきれいな手だ」などと口説いているのを見かけることがある。何んだ、それはと言いたくなるが、彼女の方も結構うれしそうな顔をしていられるのだから、幸なもので。男の手の代名詞は、大きく遅い手だ。しかも、それは節くれだち、荒てはいるが何でも包みこむ包容力と安定感があり、しかも生活の匂い最近の若者の手は、女性が顔

負けするほど、華奢で白いのがやたらと目につく。何とも頼りなく、薄っぺらに感じられてならない。

「働けど働けど わが暮し楽にならず、じつと手を見る。」

石川啄木のこのため息が、遠い昔の出来事のように感じる。いずれにしろこのように、人の「手」は、陽の当たるところで持て栄やされていく。

だが、この手に勝るとも劣らない重要な役割を果たして



足のうら

いるものがある。それは、「足の裏」である。人は、それに気付いていない。いや、気付こうともしない。実は、手の余談が長くなつたが、今回語りたかったのは、この「足のうら」のことである。

かつて人間の先祖は、四本の手足で行動していた。それが二本の足で立つことによつて、他の動物と決別をし、人間としての進化の道を辿ってきた。同じ先祖でありながら、

立つことをしなかつたものが、未だ南方のジャングルの片隅で、細々と生きている森の番人、オランウータンだといわれている。もし、人間の先祖が立つことをしなかつたら、今日のわれわれ人間の姿はなく、地球はオランウータンの世界となつていたかもしれない。まさに人間を人間として支えてきたのは、二本の足であり、それをまた支えたのは、足の裏以外の何ものでもない。

今日の文明や文化の繁栄も、詮ずる所立つことを与えてくれた足の裏のお蔭である。思えば、足の裏さまである。二本の足で立つまでは、地を這いつた瞬間から、一方は光の中で生かすはじめ、片方は、相変わらず大地と向かい合う陰の中で生き続け、それぞれ棲み分けをするようになった。

尤も、近頃はこの足の裏も、大地と向かい合うよりも、日影がな一日窮屈な靴の中に閉籠められ、汗にまみれ、水虫に噴まれていることが多い。何とも、足の裏が哀れであり、

不憫に思われてならない。私達は、もつともつと足の裏を労り、感謝しなければ罰が当たると思う。

杉田和子さんが書いた「足のうら」という詩がある。ぜひじっくりと味わい読んでいただきたい。

「人に見られることもなく ほめられることもなく 大地について立つ足の裏 五十余キロの私を支える足の裏

今夜は冷える 私は えばのように身体を曲げ ふとんの中で冷たい足の裏をさすつてやる。」

人間社会も同じことである。陽の当たるところで活躍できる人は、自分の力だけで輝けるわけではなく、自分を支えてくれている多くの陰の人々のいることを決して忘れてはならない。この人々の痛み、苦しみ、そしてその努力に対し、慰労と感謝の念を常に心に刻んでおかなければなるまい。

今夜は私も、ご苦労をかけている足の裏を、きれいに洗い清め、しみじみと労いの声をかけてあげよう。